

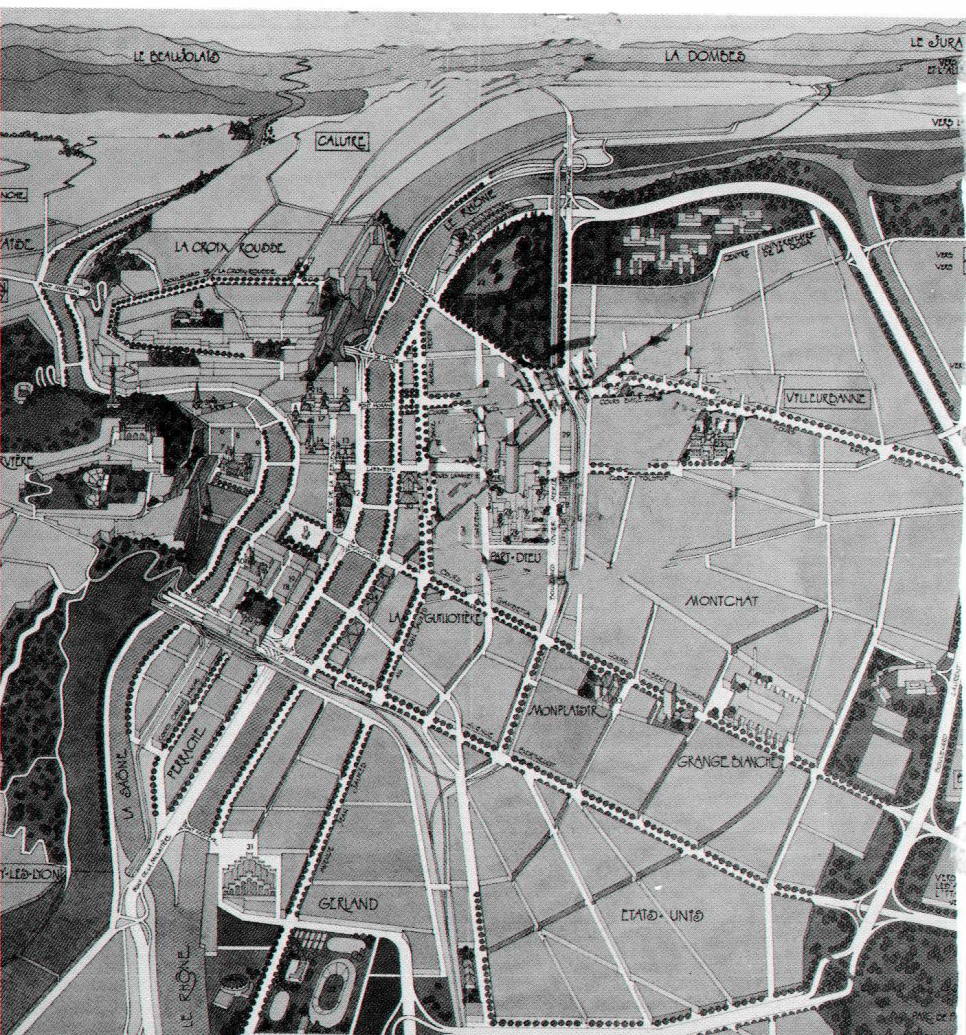
An abstract painting with a textured, painterly style. The background is a mix of light blue and green. There are bold, dark outlines of various shapes, including what looks like a hand or a figure in the upper right, and some yellow and white areas. The overall feel is dreamlike and expressive.

私のリヨン物語 久野三重

のリオン物語

久野三重

筑摩書房



私のリヨン物語

一九八六年三月三十日 初版第一刷発行

著 者 久野三重

発行者 布川角左衛門

発行所 株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二・八

電話 〇三・二九一・七六五一（営業）

二九四・六七一一（編集）

郵便番号 一〇一・九一

振替 東京六、四一二三

厚徳社印刷／和田製本

©KUNO MIE 1986

ISBN 4-480-85300-6 C 0095

乱丁・落丁本の場合は、御面倒ですが、小社読者係宛に御送付下さい。送料小社負担にてお取替いたします。

目次

12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
通話料の返済	抗議文	デュボワ氏の忠告	借家人組合	発覚	フランシュ夫人	値上げ	ヴィリユルバンヌ暮し	リヨン点描	契約	試行錯誤	到着
143	132	121	106	93	81	68	54	40	30	17	3

18	17	16	15	14	13
あとがき	クレタン氏との別れ	最終清算書	任務終了	退居通告	ある決意
233	202	190	177	164	152
	エピソード——ヴァカンスのリヨン				
	221				

私の
リヨン
物語

1 到着

一九八〇年十月十二日、夫と私は、フランス第二の都市といわれるリヨンに向かうため、パリのリヨン駅から特急列車に乗った。夫はむこう一年間、リヨンのある大学で教鞭をとることになっていた。私たちの乗った列車は、午前十時にパリを発ち、四時間後の午後二時にリヨン・ペラッシュ駅に着く。まだTGV（新幹線）の走らぬ当時では、それが一番早い特急だった。途中の停車駅は、ブルゴーニュ地方の中心都市ディジョン一駅だけで、パリーディジョン間は約二時間半である。

列車は発車のアナウンスもベルもなく、定期がくると静かに走り出した。ひかり号ほどではないにしても、相当なスピードで滑るように進む。車輛は今回はじめてのコンパートメントのない開放車、時刻表にはコライユ（Corail）と記されている。私は一九七七年にも二カ月足らずフランスに滞在したが、そのときはこの新型車輛に乗る機会がなかった。コライユの座席は中央の通路をはさみ、二等は左右に二列ずつ、一等は一列と二列にわかれ、進行方向にはなく、両端に背を向けるようにして並べられている。その結果、真ん中にテーブルをはさんで向きあう席が二つできるが、私たちにあたえられたのはちょうどその席だった。

日曜の朝の特急は空席が目立ち、車内放送も到着までたった三回、車内販売は一度も来ないという静けさである。発つまでは忙しかったし、着けばまた用事の多いことも分っているが、それまではとにかく空白で自由な数時間である。私は時差の眠気の残る頭でぼんやりと車窓の景色を眺めやりながら、久々の無為をたのしんでいた。汽車はすでにパリ近郊を通過して、いま窓外には、平坦な畑とんだらかな牧場が果てしなくひろがっている。フランスはなんて広く、豊かな農業国なのだろうと改めて思わずにはいられない。

そのいっぽうで、私の胸にゆっくり湧きおこるのは、夫の任地に同伴するという受身の形であるにせよ、長年の夢のひとつがこうしてかなえられたという嬉しさであった。

かねてフランスの地方に住んでみたい、という希望を私は抱いていた。一九六六年から六八年にかけてパリに二年暮したところのある私は、この都市の魅力も便利さもよく知っているつもりだが、それと同時に、パリは特別だ、パリだけをフランスと思ってはならないという話を聞いたり、読んだりもしている。そこには、パリは東京と同じくあらゆる地方出身者、さらにあらゆる外国人との融合体だという意味も含まれているかもしれないが、それ以上に、フランスでひとときわ群を抜いて発達した都市だから、という理由でもあるらしい。

じじつフランスには、パリほど巨大な都市圏はほかに例を見ないばかりか、政治、経済、学術・文化、工業など、すべての活動の中心がそこに集中し、どの分野においても地方を大きく引きはなしている。「パリとフランス砂漠」という端的な表現があるが、それはこのあまりにも中央集権的な状態、

地方との格差の大きさを批判したものである。そうであるとしたら、パリを見るだけでは本当のフランスは分るまい。だからこの次はぜひ地方に住んで、多少ともフランスの奥行に触れてみたい、本当のフランスをこの眼で確かめてみたい——それが私の願いだったのである。

私が地方住まいを希望した理由はまだほかにもあった。外国に住む以上はなるべく日本的なものから遠ざかって暮してみたい、ということである。そのためには、日本食レストランや日本食品はもちろん、日本人経営の旅行会社や土産物店、印刷物なら日刊紙のたぐいまで手にはいるパリは、あまりにも便利すぎると思われた。また、折角新しい環境に身を置くからには、なるべくその環境にじかに触れてみたい、ということも考えていた。じかにというのは、自力でという意味でもあるだろう。案内し、助けてくれるひとがいるのはたいへん楽だが、同時にまた、それによって見過ごすものもあるような気がする。外国と自分とを直接ぶつけてみたらどうなるか、一度は試してみたいと思っていた。知りあいがひとりもないリオンは、それには好都合な土地に思えた。

こう書いたからといって、私が日本的なものを好まず、他人の力添えを歓迎しないかというところ、それはむしろ反対である。反対だからこそ、そういうものの期待できない場所へ、無理矢理自分を追いやったかったのかもしれない。なにしろ年齢とともに強固になっていく自分のなかの日本人らしさ、個人的嗜好、保守性、消極性が私にはすこしばかり恐しく、なんとかしなくてはとしきりに思っていた矢先である。

それでも肉親は、リオンに友人も知人もいないのを心細くはないかと案じてくれた。でも私は平気

だった。フランスに住むのははじめてではないし、なんといつても先進文明国だから、と無意識の信頼を寄せていたのだろう。三年前に数日滞在したリヨンのあの落ち着いた古めかしい街のたたずまいは、不安どころか私の好奇心をかきたてた。

そういうわけで、この車中の私は、未知の土地にたいする明るいつ期待に心をはずませていた。

同行の夫の胸中は確かめたわけではないが、仕事があつてはそんな気楽なものではなかっただろう。夫は座席に落ち着くなりすぐ本を読みはじめたが、それが一週間後にはじまる講義の準備なのは聞かなくても分つた。

そんな二人を乗せて走る列車は、昼どきにディジョンに停車し、あい変わらず多くの空席を残したまま、いまはリヨンへと一路南下している。

いつの間にか、窓外の風景がだいぶ変わってきたことに気がついた。平坦だった土地がしだいにゆるやかな起伏を感じさせるようになり、遠くの地平線に低い山波が現れてからも相当の時間が経っているのだが、ふと見ると遠景の山波はあい変わらずでも、前景の土地はいつそう小刻みな起伏に富み、小さく区切られた畑や牧場のあいだに木立や人家が散在する景色は、さながら大きな箱庭を眺める思いがする。

やがて左手の畑のむこうに、川岸にそって並ぶような立木の列が見えてきたと思うと、ほどなく大きな河が姿を現した。ソーヌ河である。三年前の春、はじめてこの河を見たときは、大洪水の直後で水かさが増し、川縁の木々はなかば水に沈んでいた。いま再会したソーヌ河は、水こそ引いたが人工

の土手などがあるわけではなく、どこからが河、どこからが岸とも判然としないままに、いかにも自然な姿でゆったりと大地を流れている。

北から流れくだってくるこのソーヌ河と、スイスのアルプス山中に源を発するローヌ河との合流点——そこが私たちの目的地リヨンである。「アラル河（ソーヌ河）は……信じられないほど緩やかにロダヌス河（ローヌ河）に注ぐ……」（近山金次訳）と、約二千年の昔、シーザーが『ガリア戦記』に書いたまさにその地点だ。リヨンでソーヌ河と合したローヌ河は、そこで流路を南に転じ、果ては地中海に注いでいる。

この抜群の水利と、遠くイタリア、スイス、ライン河、大西洋岸など、各方面につながる陸路の便を抜きにしてはリヨンを語ることはできない。今日のリオンはフランス第二の都市と自負するだけあって、工業、商業、行政、学術、文化など、小規模ながら多様な都市的機能をそなえているが、その原点となったのは、なによりもまず、この地理的な位置の有利さである。

都市リオンを作ったのはローマ人だった。前四三年、彼らはここに植民市ルグドゥヌムを建設して、ガリア支配の本拠とした。そして、ルグドゥヌムを起点とする大規模な道路建設を行なった結果、この都市は水陸両路の交通の要衝として、また商業の中心地として栄えた。その繁栄は二世紀末にはいったん衰え、以後リオンは長きにわたってさまざまな試練を受けるが、歴史的に見れば、この都市はやはり第一に商業都市、それも国際的な商業都市といえるだろう。

しかしリオンにはまた、学問、芸術、とりわけ宗教の伝統も生きている。キリスト教の伝来が早く、

一七七七年に多数の殉教者を出しているこの都市において、中世には教会の力と權威が増大し、優れた聖職者たちによって教会や修道院が次々と建設され、リオンは宗教的中心地となった。やがて商業の復興にともない、リオンは経済都市として勢いを盛りにかえてくる。十五、十六世紀には、国際見本市の活況や金融業の隆盛とともに、印刷業の興隆、ラブレールやリオン派の詩人たちと画家や彫刻家らの活躍が見られた。

そのリオンが、十五世紀後半以降、イタリアから絹織業の技術を導入し、近隣の地方に養蚕業をおこして、絹織物の一大生産地となるのは十八世紀からといわれる。そしてそれが今日の総合的工業都市リオンを生む母胎となったのは、織物工業に不可欠な染料や仕上げ剤の大量消費が、必然的に各種化学工業を発達せしめたからであるという。現在では、金属工業、機械工業（とくに大型トラック、鉄道車輛）、その他も盛んで、この地域はフランスでも有数の工業地帯である。

リオンの人口は約四十一万人（一九八二年）で、パリ、マルセイユに次いでフランス第三位であるが、周辺地域を含めた都市圏人口では約百二十二万人となり、マルセイユのそれよりも多い。やはりリオンは名実ともにフランス第二の都市である。

さて、汽車はソーヌ河沿いに走っているのだが、車窓から河の姿が見えるのはごく短いあいだのことではない。やがて畑が減り、人家が増えつづけ、パリを離れたときとは反対に、行く手に大きな都市の存在を予感させる。時間的にもそろそろリオンに着く時分である。私たちは下車の準備をはじめた。のどかな汽車の旅、期待と夢想の段階は終ろうとしていた。

汽車は間もなくやや長いトンネルにはいったが、そこはもうリヨン市内である。そして、私たちがコートを着こみ、たくさんの荷物を降車口近くに運び終えたちやうどそのとき、列車は速度をおとし、静かにリヨン・ペラッシュ駅の構内にすべりこんだ。

現実はず、七、八十キロはあろうかという大荷物との格闘と、プラットホームの予想以上の大混雑という形で、いきなり私たちの前に現れた。それは芝居の一瞬の場面転換にも似た、期待から現実へのあざやかな変りようだった。

大荷物だけなら運搬車でも探せば始末がつくが、その運搬車が見あたらない。いや、そんなものがあってもなんの役にも立たないことは、駅の様子を一目見れば分った。プラットホームは、これがフランス第二の都市と自負する都市の駅のホームかと言いたくなるほどに狭く、大勢の降りるひと、乗るひとでごった返していた。しかも駅全体が目下大工事中らしく、そこここに足場や囲いが設けてあって、狭いホームをよけい窮屈にしている。

なお悪いことに、用があるようなような、というよりは明らかにこれといった用事もなさそうなアラブの男性が随所に立っていて、混雑をいっそうひどくしている。聞いてきた以上のアラブ人の多さである。その有様は、たとえれば場外馬券売場のあたりとでも言えばびったりで、そういう光景を見馴れていない私には、一種異様な雰囲気を感じさせた。

降りた場所の関係で、大荷物をかかえていったんプラットホームを端から端へ歩き、地下道をわたってまた端から端へと引きかえし、ようやくの思いで目ざす南出口にたどり着いたときは、本当には

つとした。

南出口には、あいにくの小雨にもかかわらず、夫の赴任先の大学の先生夫妻が出迎えてくださっていた。この先生は純粹に個人的な好意から——ということとは、受けいれ大学側にそういう配慮をする決まりも機関もないからだ——私たちのためにアパートを探してくれた上、今日もそこまで案内してくださろうというのである。

もとより私たちはそんな親切を期待していたわけではない。しかし夏休み前に、あなたがたのアパートを探してあげてもよいという手紙をこの先生からいただいたとき、私たちは前もって送らねばならない沢山の資料のことを考えて、その好意に甘えさせてもらった。ヴァカンスが過ぎると家探しはむずかしくなる、という噂も気がかりだった。幸いアパートは九月中頃に見つかり、私たちは必要な資料や生活用品をどうにか送りだして発つてくることができた。

もし到着早々住居探しからはじめるとしたら、もっとたいへんな思いをしたはずである。でも、このときそんなふうに労力を省いたのが原因で、やがて私は奮闘する数カ月につかる羽目になったのかもしれない。もちろん、当時はそんなことになるうとは予想もしないままに、私たちは案内の先生夫妻の親切に感謝しながら、アパートまで送っていただいた。

アパートの所在地はリヨン市内ではなく、リヨンの東部と東北部を占める郊外都市ヴィリユルバンヌである。同市の東の外れを、一九四五年五月八日街という、第二次大戦の停戦記念日にちなんだ長い名前の道路が南北に走っているが、私たちのアパートはその八七番地にあった。日曜の午後は車

の流れがよく、ペラッシュ駅から都心部を抜け、二十分ほどで目ざす建物の前に着いた。

小雨の降るなかを自動車から降りてみると、そこはなんと千葉か埼玉あたりの郊外団地をさらに淋しくしたような場所である。急いで見まわしたが商店らしきものは見あたらず、私は真っ先に買物の不便さを思った。天候のせいかうす暗い通りには人影もなく、あたりはひっそりと静まりかえっている。住みついてから分ったが、日曜の午後はいつもそんなふうだった。パン屋でさえも店をしめ、遊び盛りの子供たちも姿を見せず、まさに無人の町のようになるちようどその時間帯に私たちは到着したのである。

でも人間がいようというまいと、レ・ビュエールと呼ばれるその地区は、私が胸にいだいてはるばるとやってきた古都リヨンの面影とは、似ても似つかぬものであることに変りはなかった。

住まいのある建物というのがまた、見たところ東京郊外の公団住宅そっくりである。五階建のエレベーターなし、その五階の左側がわが家であった。

アパートの大きさは、日本流に言えば三LDK、八〇から九〇平方メートルほどの広さである。入口はいって右手に居間と子供部屋、左手に台所、浴室、寝室と並び、中央の廊下の突きあたりに小さな納戸がある。間取りそのものは、最近の東京のマンションよりもよくできてゐる。けれども一見して分る住み荒らした汚れ、使い古された家具、居間のほかはカーテンも電気の傘も満足についでない室内の様子は、私をがっかりさせた。

「これでも見たなかでは一番きれいだったのですよ」